

在日中国人留学生の異文化心理的適応に関する研究

ー自己効力感とソーシャルスキルを中心にー

○黄静怡¹・上市秀雄²¹筑波大学大学院システム情報工学研究群・²筑波大学システム情報系

s2230129@u.tsukuba.ac.jp

背景

日本学生支援機構（JASSO, 2021）の「在日外国人留学生実態調査」の結果によると、中国人留学生は日本に在籍する外国人留学生の中で**最大規模**を占めている。中国人留学生が日本でどのような留学生生活を送るかは、彼ら自身の心身の成長だけでなく、日本社会の安定にも重要な影響を及ぼす。

留学生の異文化適応に影響する要因

属性的要因

パーソナリティ特性
滞在期間、日本語能力
eg. 日本語能力が高いほど、日常生活の困難度が小さくなる

対人的要因

社会的スキル
ソーシャル・ネットワーク
eg. 会話スキルが高い人は社会的適応に役立つ

環境的要因

ソーシャルサポート
ホスト国の受け入れ
eg. 文化の共通点が少ないほど社会的困難度は高い

問題点：自己効力感が異文化適応感に与える影響や関連性を検討している研究は少ない。自己効力感の高低水準によって、ソーシャルスキルと対人ストレスコーピングを求める傾向は異なり、その関連性は明らかにしていない。

問題

目的

- ①在日中国人留学生の異文化適応の現状を把握し、自己効力感およびソーシャルスキルと異文化適応との関連を明らかにする。
②対人ストレスコーピング（ポジティブ・ネガティブ関係コーピング）に着目し、自己効力感およびソーシャルスキルが異文化適応に及ぼす影響と、その過程における対人ストレスコーピングの役割を検討する。

方法

■ 研究参加者：在日中国人留学生**156名**（男性49名、女性104名）

■ 研究方法：質問紙調査

■ 質問項目：基本属性（専攻、年齢）

・一般性自己効力感（坂野・東條, 1986）の**16項目**

（行動の積極性 6 項目、何かをするときは、自信を持ってやるほうである、失敗に対する不安 6 項目：失敗したと感じるもののほうが多い、能力の社会的位置づけ 4 項目：友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある）

・ENDCOREsソーシャルスキル（藤本・大坊, 2007, パーソナリティ研究）**6項目**

（自己統制、表現力、解読力、自己主張、他者受容、関係調整それぞれ 1 項目）

・対人ストレスコーピング（加藤, 2000）の**12項目**

（ポジティブ関係コーピング 5 項目：積極的に話をするようにした、ネガティブ関係コーピング 3 項目：話をしないようにした、解決先送りコーピング 4 項目：気にしないようにした）

・異文化適応尺度（植松, 2004）の**28項目**

（文化適応の 7 項目：日本の文化を理解している、学習適応の 7 項目：学習と研究の進行は順調である、対人適応の 7 項目：日本人々との人間関係に満足している、心身の健康の 7 項目：心身共に良好である。

上記項目は**5 件法**（1.当てはまらない～5.当てはまる）で評定した。因子分析、t検定、偏相関分析、回帰分析及びパス解析を行なった。

結果

図1 ポジティブ関係コーピングを媒介変数とするモデル

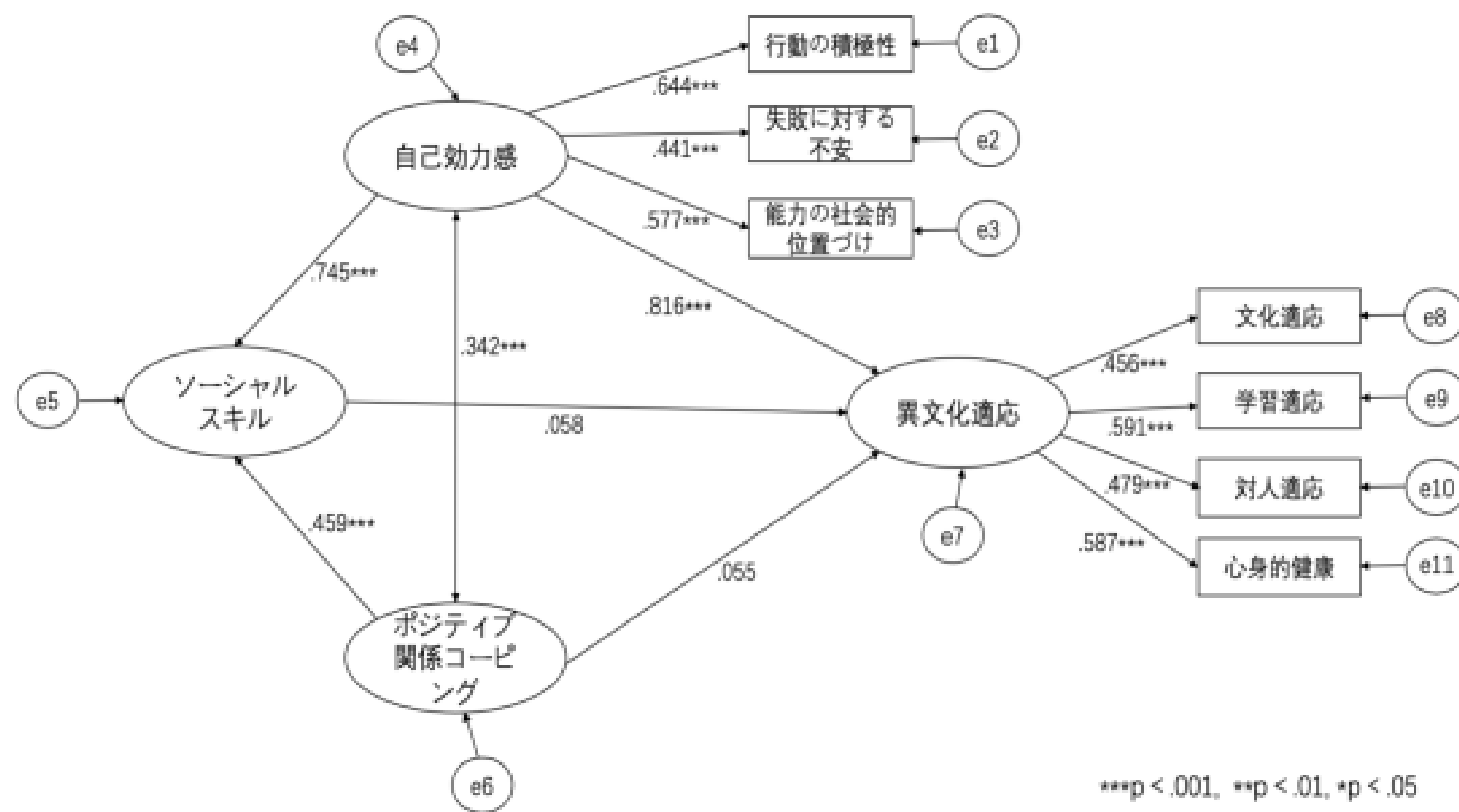
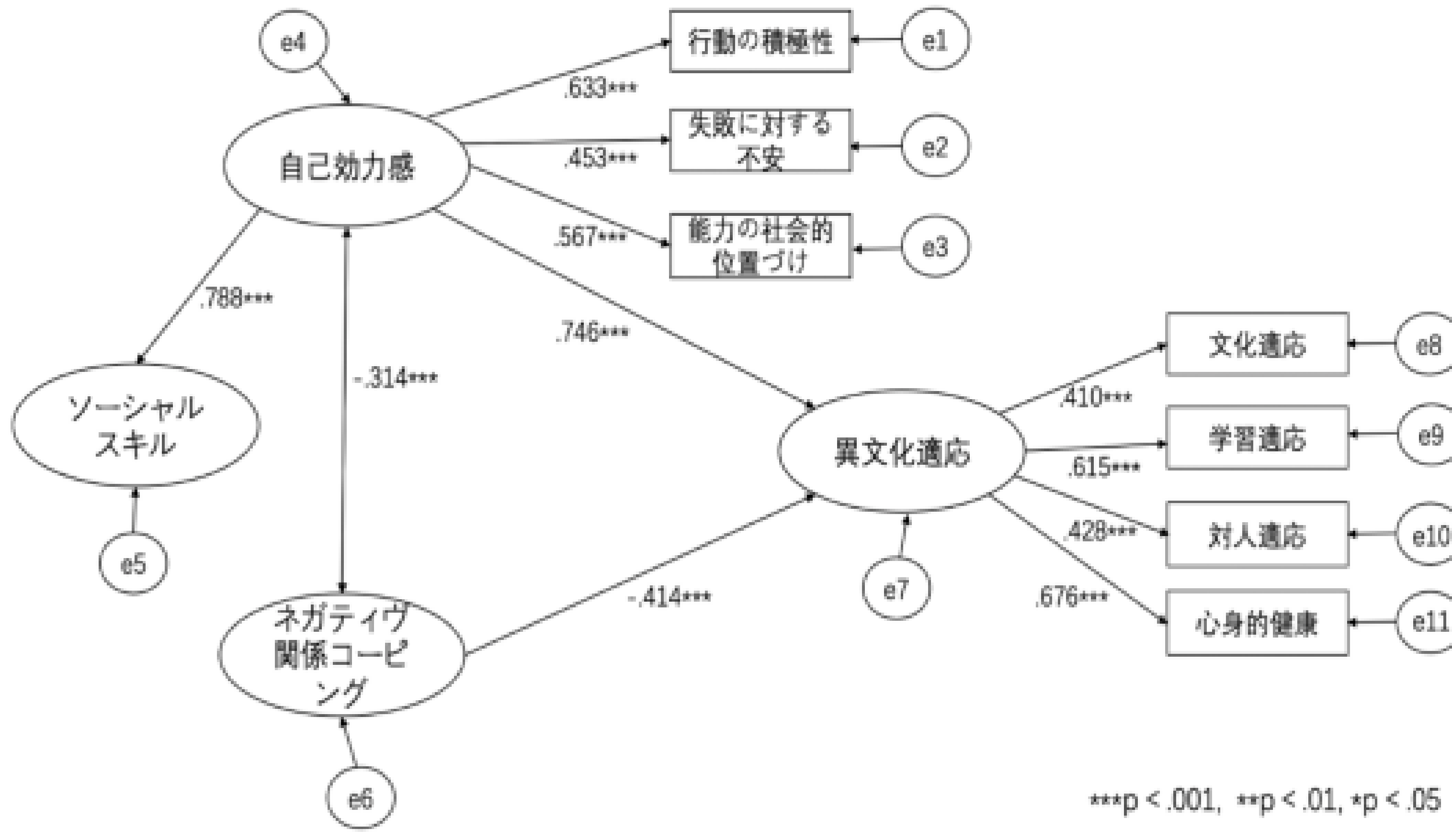


図2 ネガティブ関係コーピングを媒介変数とするモデル



●自己効能感、ソーシャルスキルと対人ストレスコーピングは異なる人口統計的変数(性別、専攻、日本語能力、滞在時間)で著しい違いがある。

●自己効能感とソーシャルスキルの間は正の相関関係がある。自己効能感
は異文化適応に正の影響を与えている。

●ポジティブ関係コーピングはソーシャルスキル及び異文化適応の

全下位因子と正の相関を示し、自己効力感・ソーシャルスキルがポジティブな対人対処を促すことで異文化適応を高めるプロセスが明らかとなった。

●ネガティブ関係コーピングは異文化適応の下位因子である心身の健康・学習適応と負の相関を示し、自己効力感の低さがネガティブな対人対処を引き起こして異文化適応を阻害するプロセスが確認された。

考察・まとめ

■ソーシャルスキルや自己効力感に含まれる行動の積極性は、対人場面におけるポジティブ関係コーピングを促進し、異文化適応における対人関係への適応を高めることが示された。一方で、ネガティブ関係コーピングは異文化適応を抑制する可能性が示唆された。さらに、対人関係への適応が向上することは、文化適応や学習適応、心身の健康といった異文化適応全体の向上にもつながることが示唆された。

■これらの結果から、在日中国人留学生の異文化適応を促進するためには、自己効力感やソーシャルスキルを高めるための支援を行うとともに、対人ストレス場面において適切なコーピングを選択・活用できるよう支援することが重要であると考えられる。

■今後は、他の国・地域出身の在日留学生を対象としても同様の検証を行い、本研究で得られた知見の一般化可能性を検討する必要がある。

参考文献：

- 坂野 雄二・東條 光彦 (1986) 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み.行動療法研究,12,1,p73-82
- 加藤 司(2000)大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成.教育心理学研究,48,2,p225-234